

生きやすい世界をつくるのは われわれなのだ

気がつけば夕暮れ。体力は衰えているのに、経済的負担はずつしりとのかかる。
景気は低迷を続け、世間に吹き荒れているのはリストラの嵐。
そんな中でも、われわれ「ミドル」だから、生きやすい世界をつくれる。

「ミドル」は「恐怖」に とらわれる世代

「中年」と呼ばれてもおかしくない年齢に差しかかった途端に、強い「怖れ」にとらわれるようになつた。

あるいはそれは、個人的な性格の問題なのかもしないが。

もともと、とくに悲観的なタイプであつたわけではない。ところが30代も後半に突入してすぐに、ふと気がついてみると、

夕暮れの森の中で道を見失い果てた気分に、私はなつていた。生きなければならぬ、しかし選ぶべき道はひどく限られている、そしてゆつくり考える時間もない、何しろ日が暮れようとしているのだから――

そんな焦燥の気分。

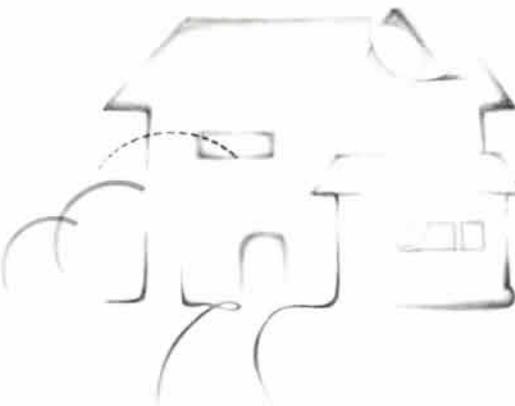
端的にはそれは、体力の衰えに由来しているのだろう。若い頃には、何がどうなつても、結局は何とかなる、できる、と感じていた。行き当たりばつたりであろうと、無駄な回り道をしようと、体力がそれを力

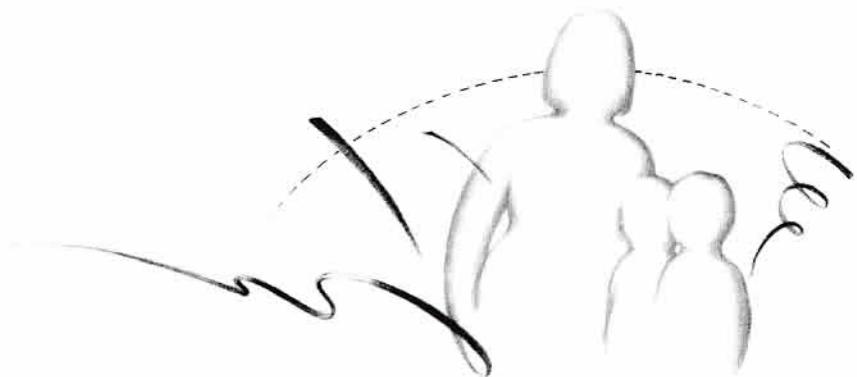
ぱーした。何かが間に合わなくなれば徹夜すればよかつたし、徹夜ぐらい何でもなかつたし、宿酔いになつても午後にはケロリ

としていたし、その晩また徹夜することだって可能だつた。そして、そうしたこと

育園の送り迎えやなんかに必要だと思つて(それを口実にして)「自動車」を買ってしまつている場合も多いし、養育費はもちらん休日の家族旅行代など、なにかと出費がかさむ。場合によつては、これに老親の介護費が加わつたりする。

とにかく荷物が両手にいっぱいなのだ、この年代は。だから、自由気ままにとはいひかない。考えて行動しないと、まずい。





われらの世代の歌人である穂村弘は、この状態を「フル装備の人生」と、うまく表現した。あれが欲しいこれが欲しいと思つてもそれがなかなか実現せず、結果かえつて身軽で自由だったのが若者時代だったわけだが、「ミドル」ともなると欲しいものはだいたい手に入つてしまうもので（もちろん借錢したりして、手に入れるのだ）、すると今度は手に入れたものの重みに、突然驚くことになる。飛べない、走れない、泳げない。そうなつて初めて、両手がふさがっていることに気づく。だからといって手を放してしまうことはできない。「荷物」には家や車などだけではなく、パートナーや子どもとの暮らしが入つているのだ。そしてそれは、分かちがたく紐でつながつてゐる（よう見える）。

経済が成長している時代には、こうした「フル装備」を目指し、実現することは、基本的に幸いなことだつた。だが現在では、たいていの勤め人にとって、フル装備の人生を支えるための収入基盤が、不安定なものになつてきている。日本経済に再びの拡大を求めるのは難しいようだし、アメリカン・スタンダードによるグローバル化が進行して、各業界にリストラの強風が吹きつけ、ほとんどの人がその身邊に冷たいすきま風を感じている。かといって日本では、まだ転職市場が成長していないから、たいて

いの人は今の職場に「しがみついて」いるほかない。それに、両手に荷物を持つたまま船から船へ飛び移るのは恐怖だ。だから、もあるいは自分の乗つた船 자체が沈みかかつてゐるように見えるとしても、必死に水を掻い出しているしかない。

つまり、恐怖に支配されながらの労働強化が現前している。それでもみんな我慢しているのは、失うものをたくさん持つてゐるから。荷物がなければたぶん泳げるものかもしれないが、言つたように、多くの中年期の人間には、荷物を投げ棄てるという自由は、すでにない。いや、本当は荷物を投げ棄てることだって選びうるのかな想像力が、すでに失われてしまつてゐるのかもしれないが、そう考えてみる自由

のことしか言えないが、少なくとも、「船から落ちたら最後、そこは荒海」という思考様式、ひいては現実を変革する必要がある。船が要らないというのではない。冷たい荒海を、浮いてゐるのが必ずしも不快ではない、暖かい海に変えるのだ。

自分の乗つてゐるその船だけが、「世界」だと考えれば、あるいは考えさせられてはいないだろうか。船の乗組員に与えられる食事だけを、あてにしすぎてはいないだろうか。海にだつて、食べられる魚は泳いでいるかも知れない。それから落ちたら最後、そこは荒海」という思考様式、ひいては現実を変革する必要がある。船が要らないというのではない。冷たい荒海を、浮いてゐるのが必ずしも不快ではない、暖かい海に変えるのだ。

「今の船を降りる」選択はあるえないのか？

立ち泳ぎをするためには、やはり貯金は

多少しておきたい。それから住宅ローンを組んでいる人は、繰り上げ返済を目指すことを。この「縮む時代」にも、借錢は自然に縮んでくれないのでから、大きな債務を抱えているということは、それだけで人生の選

では、どうすればいいのだろうか？　このまま恐怖にとらわれてゐるほかないのか？

突きつめれば、解答はそれぞれの人に

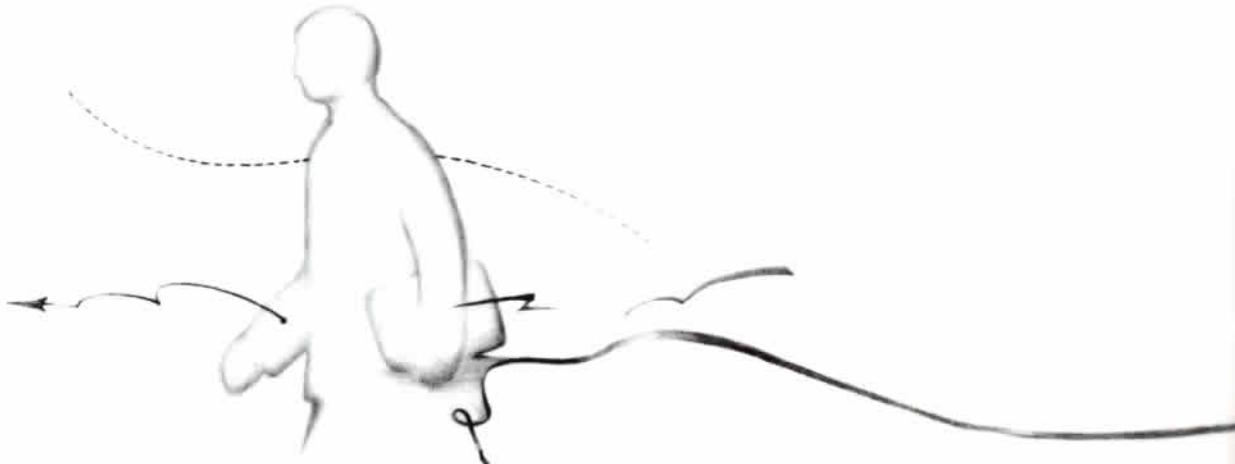
いることしか言えないが、少なくとも、「船

拵の自由を狭めてしまう。

どうやつて貯金や繰り上げ返済をするのかですって？ それは、家計のサイズをひと回り小さくするしかないでしょう。必要なものは買わない。身近な暮らしの中に娯楽を見出す。そうするといつまで経ても内需は拡大せず、景気は回復しないと政府は言うだろうが、そんなこと気にしないでいいと私は思う。だいたい、社長や事業主ならいざ知らず、普通のサラリーマンまでがビジネス書・経済書を読んで、景気回復ばかりを熱望しているのはちょっと変だと思うのだ。社会のひすみや分配の不公正こそをわれわれは正していくべきなので

あつて、「景気」（パイの拡大）によって問題見えなくし、先送りするのは健全な態度ではない。それに、地球環境を考えれば、景気の拡大ばかりを望むのは倫理的ではない。人類の領分が、いつまでも膨張し続けるわけにはいかない。いつかは「ゼロ成長」で安定しなければならないのだ。

少し言い足すけれども、「景気拡大は倫理的ではない」というのは、もちろん一つのイデオロギーだ。だが、同様に、「景気拡大は良いことだ」というのもイデオロギーであることを自覚したい。少なくとも、現状の産業構造での、化石燃料消費の増大を伴う経済拡大は、地球の未来にとって犠牲が大きすぎる。



それでも、環境収奪的ではない経済成長

長ということも、実現しうるとは思う。それは、情報活用の精緻化による地球資源と地域資源の利用の最適化によつたり、風力発電や太陽光発電の商業化や、モビリティ（交通・輸送手段）のエコ化による、エネルギー供給構造の作りなおしによつたりする。そういうラディカルな方向転換を伴うのなら、「成長のイデオロギー」にも、まだ生き延びる余地はある。

仕事以外の活動が人生を多面的にする

行政の責任領域を狭める、という新自由主義の考え方でそう言つているのではない。行政はNPOと肩を組むべきだ、と言つてゐるのだ。たとえば、地域の実情について一番ナマの情報を持つてゐるのは、地域住民自身である場合が多いのだから。そつして人々が、さまざまなNPO活動を通じて暮らしを自律するようになれば、人生のある時点で「弱者」になつた人々にきめ細かい対応がなされるようになるだろうし、NPO自体も、雇用や就業機会を生み出しうる。

まあ、フルタイムの雇用を可能にしているNPOは海外でも限られているから、おカネ的な問題をすべてNPOが解決するというわけではない。ただ、「仕事」以外にも何らかの活動に参加しているということは、人間関係の面でも、アイデンティティの足場という意味でも、その人の人生を多面的にする。そうして、本来多面的であるはずの「人生」の風景を見渡す視点を取り戻せば、経済的な行き詰まりから自殺まで考えてしまうというような、悲惨な視野狭窄からは救われるのではないか。

たとえば、今のところとくにおカネにはならないNPOの話を一つしよう。友人がかかわっているものに、「緑のダム北相模」というNPOがあるのだが、北相模の森は

東京や横浜に近いので、そうした都市圏に勤める中高年（会社ではけつこう偉かつたりするらしい）が、森の香氣に触れに来る。ただそれだけ。

いや、そこでは間伐や炭焼きなど、林業のまねごとのようなことをするのだが、林業というスキーでももう経済的に成り立たないから、「緑のダム」の人たちは、「都會の人間が森にかかる」ということに含まれる、おカネには簡単に換算できない価値を見つけて、できればそれを事業化しようとしている。そこで専従職員が生きていくチャンスが生まれればしめたものだし、そうでなくとも、週末、森に集う中高年たちは、そこで、確かに何かを得ている。忙しいはずの人たちが週末を割いてとにかく森にいたがるのだから、そこには彼ら彼女らを生きやすくする何かが、確かにあるのだ。

われわれの手には、 情報デバイスがある

おカネの原理だけで動くのではないさまざまな活動を可能にするのに、実は状況がひとつ良くなっている。パーソナル・コンピュータとインターネットの普及だ。もしかすると、現在の「ミドル」は、コンピュータやネットを抵抗なく受け入れて、長い現役

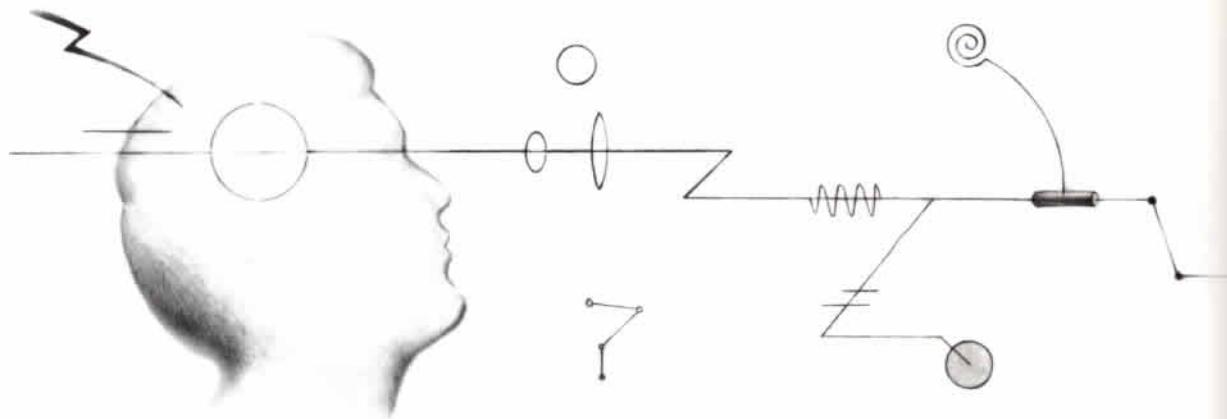
時代を送り、そして老いてゆく最初の世代なのかもしれない。昔は、もうからない集まりを運営するのには郵送料や電話代がいちいち大変だったが、電子メールのおかげで通信コストは劇的に下がった。忙しい同士が、負担の少ない形で連絡を取り合うことも可能だ。また、ネットには、それぞれのライフステージを生き抜くための良質の情報交換の場も多様に育っている。私の連れ合いは妊娠・出産期に、ネットでの掲示板を通じてちょっとした疑問を解決したり、病院の評判や特徴を調べたり、実際に有用な情報を得ていた。子育て期や老年期にはそれに応じた掲示板があるし、また、われわれ世代は、年齢を加えながら、それをつくっていくだろう。ここにはおカネはほとんど介在していないが、現実に人は情報を交換し合って、助け合っているのだ。小さなことのようだが、「必ずしも行政に頼らないセーフティーネット」というのは、たとえばこのように現前している。

インターネットというのは、自分が地域に足場をつくり直す活動にももちろん使えるが、文字通り世界に開かれてもいる。この時代には、コミュニティーというのは、場所に規定される概念ではない。町内会のホームページをつくってもいいし、同じ難病を抱える世界中の人が、マーリングリストで最新情報を伝え合う、ということでも

きる。パーソナル・コンピュータの登場に際して、ティモシー・リアリーは「これは革命のツールだ」と言ったそうだが、確かにあちこちで、ようやく革命は起りつつある。メキシコのチアパス州の貧しい先住民農民の組織は、状況をネットで発信することによって政府軍の弾圧に反撃しているし、日本にいるわれわれも、自宅にいながらにして金山寺味噌だろうがカスピ産のキャビアだろうが何でも買える。

だが一つ、考えてほしいことがある。電子デバイスを手にすることによってわれわれの生活は便利になり、新たな可能性を持つたが、それを支える富は地球のどこから来たのか、ということ。先進国以外の国には、あるいは先進国にあってもその底辺においては、コンピュータにアクセスできない人々が多数いる。豊かな社会の快適な暮らしは、「南」と「北」の圧倒的な経済的不均衡の上に成り立っている。せっかくわれわれは世界を情報でつなげる双方のツールを手にしたのだから、その思考も世界に向けて開きたい。どうせ買うならフェア・トレード（収奪的でない、公正を考えた貿易）の商品を購入するとか、富の偏在をひどくする種類のグローバル化に異議を唱えるとか、核廃絶のキャンペーンに署名するとか、やれることはいくらかある。

その「いくらか」をわれわれの世代の多



数が持続的に積み重ねていくことによつて、世界は大きく変わりうる。なにも、署名や意思表明が即座に状況を変えると言つてゐるのではない。ローコストの通信手段を使つた、われわれの世代の日常的な意見交換の中で、われわれ自身の意識を点検し、自己を再教育するのだ。そして、われわれが変わつてこそ、世界が変わる。この文の冒頭の方では「いぶん弱気な」とも書いたが、考えてみれば、なんといつても「ミドル」はこの社会の中核の世代だ。経済生活でも、子育てや教育といったライフスタイルにかかることでも、さまざまなもので、現役の世代。現実的な人生を送らなければならぬ世代の意識が変化してこそ、本当に現実は変わりうる。

生きやすい世界をつくるためのシステム構築

地球的規模の問題にも、地域の問題にも、個人的問題にも、同等と言つていい意識の注ぎ方をする。これが、グローバリゼーションの時代であり、同時に地域の時代であり、「心」への回帰の時代でもある現在を生きるのに、妥当な姿勢だと思う。そうした非階層的な世界把握のあり方は、すでにネット上の情報環境の中では現実化している。ここに大きな、変化への契機があ

る。しかしながら、電子デバイスが万能であるわけではない。

最近、こういう話を聞いた。ネットショッピングの普及しつつある現在、「越中富山の薬売り」は絶滅したのかと思ついたら、それどころかますます繁盛しているそうだ。そのわけはこう。現在の高齢者では、ネットショッピングの仕組みを使いこなせない人がまだまだ多数派だ。ネットで買ってクレジットカードで決済、ということにはアリティーが感じられなくて、信用できないのだろう（それは今のところ根拠のある感覚だ）。それに対して、「置き薬」のシステムでは、人間がちゃんと来る。そして、「使った分だけ支払い」という分かりやすい約束をする。これは、商売でありながら商品のやりとりを越えるところがあつて、たとえば、年に何回か回つてくる営業員が、高齢者の「どこどこが痛くてねえ」という声を聞けば、「それには」の薬がいいですよとか「それは医者に行つた方がいいよ、おばあちゃん」というアドバイスをするだろう。良心的な営業員だったら、前に訪問したときと調子が大きく変わついたら、それとなく回つたついでの近所に様子を聞くとか、かかるべき機関に連絡が行くよう手配する、とかするかもしれない。

そのように定期的に様子を見知つてくれる他人がいて、しかもそれはやっぱり商売もあるから、高齢者の方も気兼ねしなくていい。そういう距離感がちょうどよいらしい。

われわれ「ミドル」の世代が高齢者になつたら、きっとほとんどの人がネットショッピングをしているだろう。しかし、それだけではなくて、ときには顔の見える、ちょうどどいい距離感の関係をつくるシステムを、どれだけ構築できているか。それが、われわれの人生を豊かで安心できるものにできるかどうかの、案外勝負どころだと思う。商売でないようでいて、商売であり、地域に密着しているようでいて、世界に開かれ、みんなの問題であり、個人の問題でもある、そういう両義的な領域をシームレスにとらえることが、「右肩上がりではなく、これからのはず」のことであり、必要なことではないだろうか。そういう気がする。

堀切 和雅(ほりきり かずまさ)

1960年生まれ。84年から2000年まで、岩波書店に勤務。月刊総合雑誌『世界』などの編集にかかわる。かたわら、劇団「月夜果実店」を結成・主宰。これまでに21回の公演を行う。主な戯曲に「墮ちる星☆割れる月」「マンボウ20号」など。2000年より現職。大学での担当領域は「表現」。学生たちと舞台づくりをしながら、さまざまな問題解決能力と、自由な発想力を得るために授業を行っている。著書に、「三〇代が読んだ『わだつみ』」「結論を急がない人のための日本国憲法」「30代後半」という病気」(以上筑地書館)、「ゼロ成長」「幸福論」(角川書店)『不適切なオトナ』(講談社)。